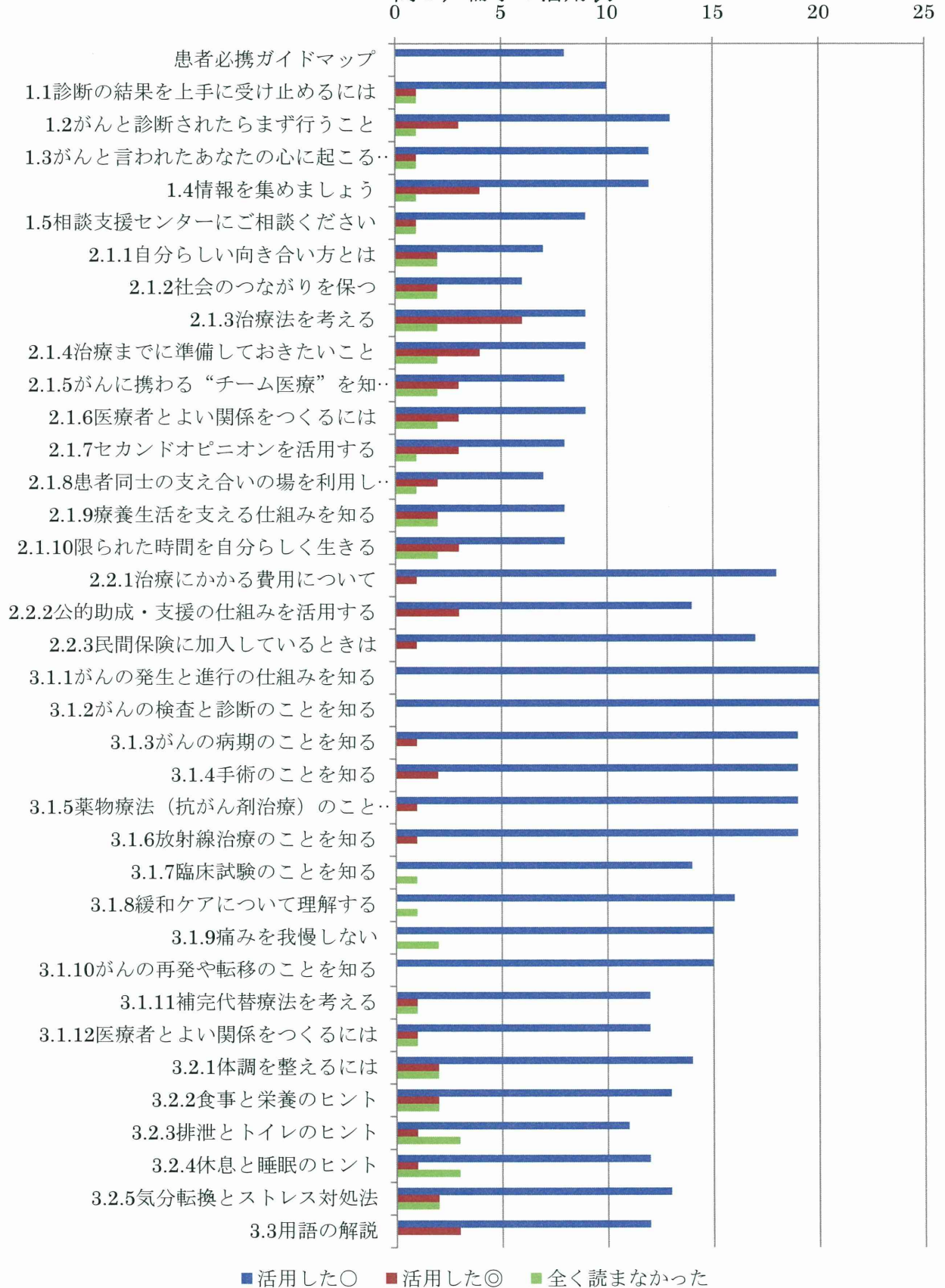
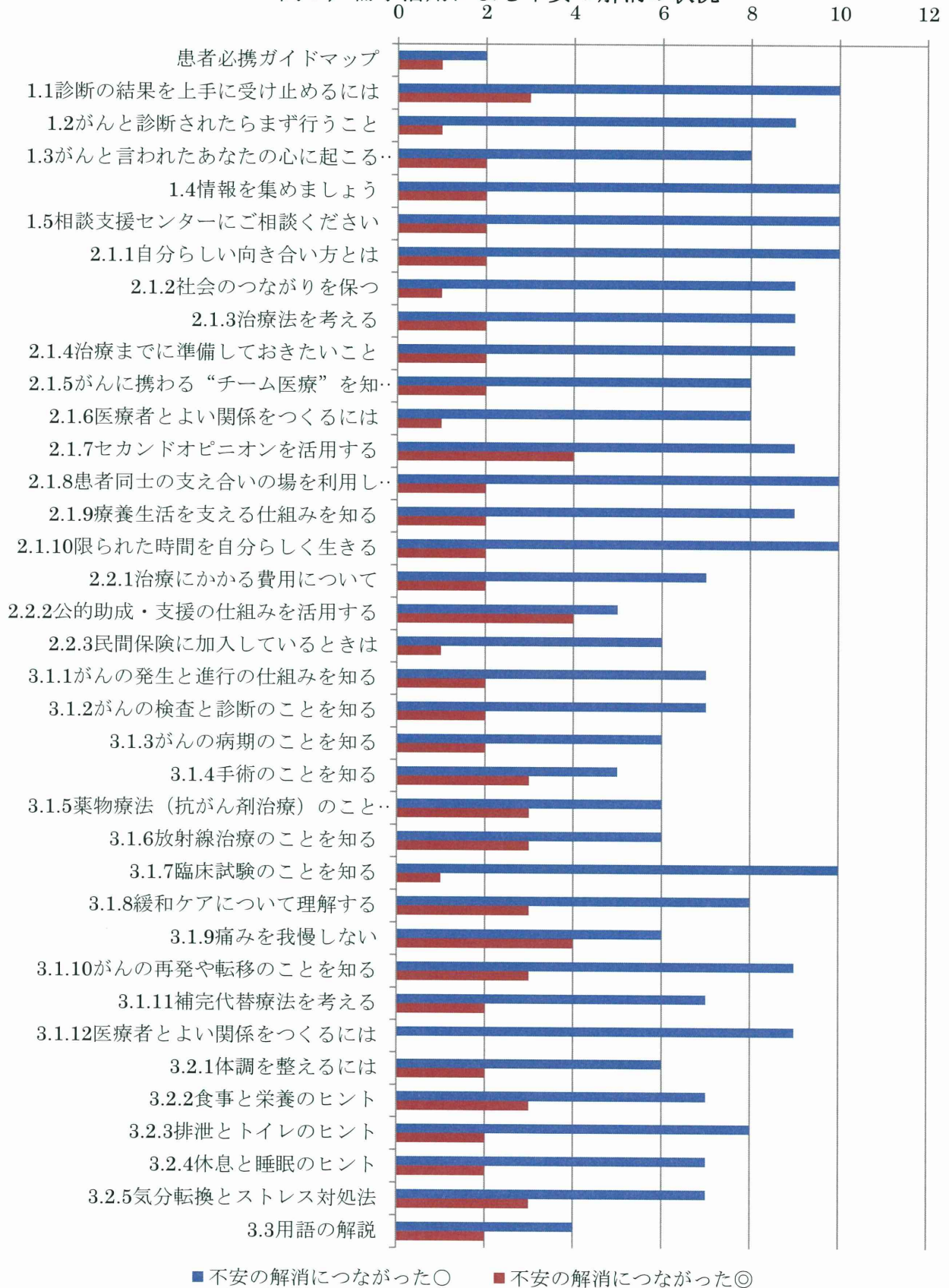


問9) 冊子の活用状況



問9) 冊子活用による不安の解消の状況



【資料⑤】

あなたの普段の生活、あるいはがんに関するこれまでの取り組みを踏まえて、これらの冊子に加えた方がよいと思う情報がありましたら、お書きください。
予防
予防のコーナーを付け加えてほしい。
保険
最低限の備えとしての保険（がん保険）のアドバイス、例えば先進医療保険の加入など
情報収集
インターネットは大変便利なツールですが、嘘や罣も多数存在します。正しい情報の取得先を。
治療
部位別で理想の治療方法一覧があると助かります
治療をしない選択肢もあるということ、治療しない方が結果的に長く生きられる可能性もあるということ、患者も家族も「末期」を受け入れる心構えを持つ、など。当時のご担当の先生からは、「治療するかしないか」のみで、緩和ケアのお話がなかった。知識がなく、末期について受け入れ難しく、治療を選択してしまった。
重粒子線治療が TV 等で取り上げていますが、治療法の中に取り上げてほしい（勿論、患者必携の中に）。
経済的負担・支援
差額ベッド代の病院側の請求に対し、不払いできる要件をきちんと明示し、患者が泣き寝入りし、高額ベッド代を支払わなくても安心して治療を受けられる情報をこの本で開示して下さい。
高額療法費の制度は変化しています。総合病院は、認定票提示で十分。
がん患者でも身体障害者の申請ができることをもっと具体的に。
先進医療
先進医療の内容をもう少し詳しく（費用・病院等）
先進医療について部位別がんにも有効なものと治療できる施設を掲載頂きたい
先進医療についてもっと細かく書いてほしいと思いました。どのがんにも効果があるのではないと思う。その部分をお願いしたいです。
患者さんの体験
この本は、医療者側から患者側へのアプローチで、これから、罹患する可能性のある人には希望の光となり得るものですが、既に罹患し治療中の患者で、迷っている患者に患者の立場からメッセージを下さい。
患者さんの手記に、年齢など書き加えてもらえるとその方の背景と自分を重ね合わせやすくなると思います。
特になし
特に付け加える事は今のところありません。

現在、患者必携に組み合わせて活用する、身近な相談窓口や医療機関の情報を取りまとめた「栃木県版 地域の療養情報」が試作されています。 「地域の療養情報」に取り入れてほしい情報やテーマなどありましたら、お書きください。
医療機関
どの病院でどのような治療・サービスが受けられるか、部位別に力を入れている病院がわかると思います
抗がん剤や特殊な治療の専門医がいる医療機関の情報があると参考になると思う
特定部位がん部に専門の医師がいるかいないか書き添えて頂くと参考になります
近隣地域の情報
近県の情報も欲しいです
地域外でセカンドオピニオンを探す情報（東京・埼玉・群馬等々）
相談窓口
患者の会など相談窓口
インターネットがわからない、使うことのできない人達のために、具体的な患者会の連絡先
がんになった人、家族の方の精神面でのケア（相談）をどこにしたらいいのか掲載してほしい
患者会などの詳細情報
特になし
現在の試作版だけでも十分活用できると思います
その他
生活習慣病全般について
栃木県の県民に共通して罹りやすい病気について

患者必携についてご意見・ご感想、ご提案などあればお書きください。
がんになる前に知りたかった
がんで手術を受けたので、そのときにこのような「患者必携」本があれば、もう少し自分でもがんに対する知識を増やすことができ、不安を解消できたと思います。
自分や華族・知人ががんになったら活用したい
自分と家族・知人が、今後万が一がんにかかったら参照したい。
家族ががんになってしまった時に少しでも力になってあげることができると思いますし、数多くの方に広げてあげたいと思います。
もし、自分や家族ががんになったら、是非活用したい。
いざという時のためにそばに置いておきたいです。
がん保険の仕事を通じて活用したい

私は、がん保険の仕事に携わっている者でございますが、今回このような冊子を頂けました事をとて感謝いたしております。仕事の上で多いに活用したいと思ひますし、情報をお客様にいち早くお伝えできると思ひます。
役に立つ
患者の立場にたつて作られているすばらしい内容だと思ひます。
想像以上に理解しやすく、内容的にもすばらしいと思ひました。
初心者用としては最高だと思ひます。
内容的に文句はないと思ひます。
わかりやすくて良いと思ひます。
読みやすく、イラストも多く、値段も安ければ完璧。
普段わかりにくいことが、細かく書かれていて大変参考になると思ふ。
とても読みやすく、参考になりました。自分の病気に対して認め、正しい知識で先生を信頼して治療を行うことができると思ひました。ありがとうございました。
とてもわかりやすく大切に利用したいと思ひます。
がんという病気に対して、メンタルな部分での解説もあるので、万が一罹患した場合には、とてもこころ強い一冊。
タイトル通り最初の一冊としては、参考になる本だと思ふ
コンパクトでとても役に立つ内容でした。
更に詳しい情報がほしい
全体を網羅するために仕方がない部分だと思ふが、それぞれのがん治療に対する内容が少しものたりない感があつたので、さらに詳しい情報を HP などにリンクして頂けるといろいろな面で助かる部分が増えるのでは。
がんについて学べる場がほしい
がんと診断されて、命に関わる程度ではないとわかるまでの精神的不安が一番辛いと思ひます。まだまだ、がんに対する知識が薄い人が多くいると思ふので、身近にがんについて学べる場があれば参加したいと思ふ。
軽量化してほしい
携帯するには、もう少し薄くできれば、なおよいと思ひます。
少し重いのが難点です。
本のサイズを A4 にして、厚さを薄くした方が持ちやすくなると思ひます。
役に立たない
内容が簡単すぎて読む必要がない所が多い。

平成23年6月1日発行



栃木県立がんセンター (Tochigi Cancer Center)

がんセンターだより

※当センターは(財)日本医療機能評価機構による病院機能評価の認定を取得しています

第18号

- 基本理念**
学問に裏づけられた 最高の 技術を、愛の心で 県民の 皆様に提供します。

基本方針

 1. 患者さんの権利を尊重し、相互の理解のもとに診療をすすめます。
 2. 病院スタッフのチームワークにより、県民のための最良のがん医療を実践します。
 3. がん診療の拠点病院として、病診連携を重視し、新しい医療の開発に努めます。

がん「患者必携」と地域連携ネットワーク構築

病院長 清水 秀 昭



現在、栃木県において「がん「患者必携」(以下、「患者必携」)という言葉を知っている方はどれくらいいるでしょうか? 「患者必携」とは、初めてがんになったがん患者・家族のためのがん情報の本です。「患者必携」はA5判・464ページで「がんになったら手にとるガイド」の表題名が付いています。内容は「がん」と言われたとき「がんに向き合う」「がんを知る」の項目からなり、その他に16がん種の療養情報や「わたしの療養手帳」という、がん診療の経過において「自分の体や気持ちと向き合うための道具」としてのメモ冊子から成っています。制作にあたって、主に国立がん研究センターのがん対策情報センターが中心となり、専門家のみならず、患者・市民パネルというがん患者・家族・市民で構成された方々も参加して意見を重ね、試作版を経て完成版(「がん情報サービス」ホームページ(HP)参照: http://ganjoho.ncc.go.jp/public/qa_links/hikkei/hikkei01.html)が作成されました。このサイトからダウンロード・印刷も可能ですし、この「がんセンターだより」が発行される頃に書店などより販売されているでしょう。完成版は今後各方面からの意見を集約して2年ごとに改訂版が作られていく予定です。

この書籍のがん情報にがん患者・家族が接することで患者自身が病気に立ち向かえるように、全国のがん患者・家族に広く普及・活用されるように、また「患者必携」が有用であるか評価するために厚生労働省の研究班も立ち上げられました。私も班員として研究班に参加して、地域がん診療連携拠点病院の相談員の方々などの協力をいただきながら、栃木県での取り組みを推進しています。その一環として2010年11月7日(日)栃木県立がんセンターにおいて市民公開講座「みんなでつくろう、地域で支えよう、がん患者さんの支援の輪ーがん「患者必携」栃木の取り組みー」(栃木県立がんセンターHP参照: <http://www.tcc.pref.tochigi.lg.jp/other/19.html>)が開催されました。当日の様子をまとめたDVDも制作しました(希望の方は、栃木県立がんセンター相談支援センター、直通電話: 028-658-6484に)。制作した国立がん研究センターがん対策情報センターでは完成版見本を全国のがん診療連携拠点病院などに送付し、それらの医療機関などで見本を閲覧できる体制を各施設で準備をしている段階です。

がんの療養生活を過ごしていく中で大事なことのひとつに療養情報があり、「地域の療養情報 栃木」試作版(http://ganjoho.ncc.go.jp/public/qa_links/hikkei/hikkei03.html)も作成されました。さらに、県内の医療関係者やがん患者・家族・市民の方々などのご協力をいただき、改訂を検討中です。

栃木県では毎年1万人強の県民ががん患者になっています。それらの患者を支える家族・医療スタッフ・市民を含めると何万人の県民に「患者必携」が知られ、活用されれば良いでしょうか? これらの活動をとおして、公開講座のテーマである「がん患者さんの支援の輪」のネットワーク体制が強いものになるように努力をしていきたいと考えています。



目 次

- | | |
|--|---|
| <p>◆がん「患者必携」と地域連携ネットワーク構築 1</p> <p>◆新しい外来化学療法センターの紹介 2</p> | <p>◆禁煙サポート 緑の外来 3</p> <p>◆外来診療のご案内・交通のご案内 4</p> |
|--|---|

分担研究報告（高田）

厚生労働科学研究費補助金 第3次対がん総合戦略研究事業
平成23年度 分担研究報告書

相談支援センターを中心としたがん情報「患者必携」の配布・普及のあり方に関する研究

分担研究者 高田 由香 静岡県立静岡がんセンター よろず相談 主幹技師

がん対策推進計画に基づいて作成された「患者必携」の情報をより当事者に適切に届け、その内容が当事者にとって有効な情報であるか評価するために、静岡がんセンターを初診で利用した患者に対してアンケート調査をおこなった。情報処方に基づく提供体制の整備も必要である。利用者が活用しやすい相談支援センターが中心となり「患者必携」を配布し普及させていくための方法の確立が必要と考える。

A. 研究目的

静岡がんセンターでは1日当たり30名程度の初診患者が来院しているが、紹介予約制を基本としているため、他院にてがんの可能性や告知を受けて来訪する患者が大半である。まずは精査・診断や、今後の治療が患者・家族の一番の関心事であるが、さまざまな場面で決断を迫られることが多く、短期間に重要な判断をするためにも適切な情報を欲している当事者が多い。

「患者必携 がんになったら手にとるガイド」はがんと診断された直後の患者に役立つ情報を提供するというコンセプトで作成されているが、果たして当事者の情報収集や意思決定などの主体的行動に役立つツールといえるのか評価が必要であった。情報内容の有用性を評価すると共に、その活用状況を調査することを目的とし、初診患者に対してアンケート調査を行った。

また同時に「地域の療養情報（試作版）」、静岡がんセンター患者・家族支援研究部で開発・提供している情報ツールやウェブサイトである「あなたの街のがんマップ」「WEB版がんよろず相談」「Survivor SHIP.JP がん向きあってもに生きること」についてもあわせて紹介し、有用性について評価を依頼した。

診察の前後に相談支援センターに立ち寄ることにより心情の整理や生活相談を行うきっかけづくりをするとともに、情報の一つとして「患者必携」を配布し、評価を受けることを目的とした。

B. 研究方法

初診患者が診察前後により相談（相談支援センター）に来訪する流れを標準化する。そのために初診受付にて、冊子のパンフレットとアンケート協力のお願いのチラシを配布した。患者・家族が医師等の医療者以外にもがん専門相談員と面談することで、告知後のショックや今後の治療・生活に対する不安などを表出することができ、いま必要な情報を適切に処方して提供するしくみを作る。その際に「患者必携」の中のどの情報が役立つのかということも合わせて伝えることで、活用を促すきっかけにもなる。

同時に医療者からの評価を得るため、在宅療養支援診療所や地域連携クリティカルパス連携病院50カ所、および訪問看護ステーションやよろず相談薬局（研修を受講し情報ツールを設置した調剤薬局）30カ所にアンケート調査を実施。

（倫理面への配慮）

平成23年8月、静岡県立静岡がんセンター探

索研究倫理審査委員会にて審議され、承認を得たうえで実施。

C. 研究結果

医療者向けに実施したアンケート調査は、医療機関、訪問看護ステーションおよび調剤薬局（相談機能を強化）を対象としたものと、静岡がんセンター初診患者を対象としたものを実施。

患者サンプル数は 50 名（有効 49）。男女比は 6:4 で男性が多く、年齢では 50・60・70 歳代が多く全体の 73%を占めていた。初診でチラシを受け取り、当日によろず相談を来訪した方が 17 名 36%、2 回目の受診の際に来訪した方が 12 名 24%、両方合わせると 60%の患者が受診してから早い段階で患者必携を入手したことになる。疾患別には大腸がん、胃がん、乳がんの順で多く、全体の 52%を占めていた。追跡調査の結果、病期はⅠ期・Ⅱ期合わせて 46%であり初期で紹介に至っているケースが多い。一方、精査の結果、Ⅲ期・Ⅳ期と診断された患者も 34%おり、進行した状態で受診行動をおこし病気が確認されて紹介受診に至った患者も相当数いた。治療方法については、手術 52%（内視鏡手術を含む）と圧倒的に多く、化学療法 24%、放射線治療 6%という結果であった。「がんになったら手にとるガイド」の活用度や有効性評価のアンケート集計は、H24,5,9 現在で回収数 36 件、75%となっている。評価内容の分析は、今後継続して実施予定。

D. 考察

今年度は「患者必携」の活用度や有効性を評価するための患者アンケート、および医療者アンケートを実施した。

具体的な内容分析はこれからであるが、患者アンケートの配布・回収については、当初の予定よりも時間を要した。初診患者全員に患者必携の案内とアンケート協力の依頼文を配布したが、実際の協力行動にうつる率は低く、1 日当たり 30～50 人の初診患者のうち 0～2 人程度に留まったこと

が要因であった。

実際の協力行動がみられた患者のうち、単独で来訪するケースは、早期発見で根治治療が見込める場合が多かった。また家族が積極的に情報収集する行動がみられ、患者は促されてアンケートに協力するというケースもみうけられた。

これらのことから、自立支援型がん情報を積極的に入手しようという行動には、情報を受け取る側のモチベーションや心理状態が影響することが考えられる。今後、回収されたアンケートから MAC スケールや有用性の評価をマトリックス的に検証するなど、詳細な分析を行うことが必要と考える。

E. 結論

今後の分析結果によって、「患者必携」に対する患者と医療者の評価の相違や、患者が自発的行動をおこす要因などが明らかになり、真の自立支援型がん情報の提供方法や内容の更新に示唆を与えるものになると期待している。さらに、病期や受診状況に則したよりきめ細かい有用な情報内容の検討や、病状進行などの変化に則した継続的な情報提供のあり方への提案にもつなげたいと考える。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

なし

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし



「自立支援型がん情報の 評価と普及に関する研究」

～進捗状況の報告～

静岡県立静岡がんセンター
疾病管理センター 高田由香

医療者向け調査

＜配布機関＞

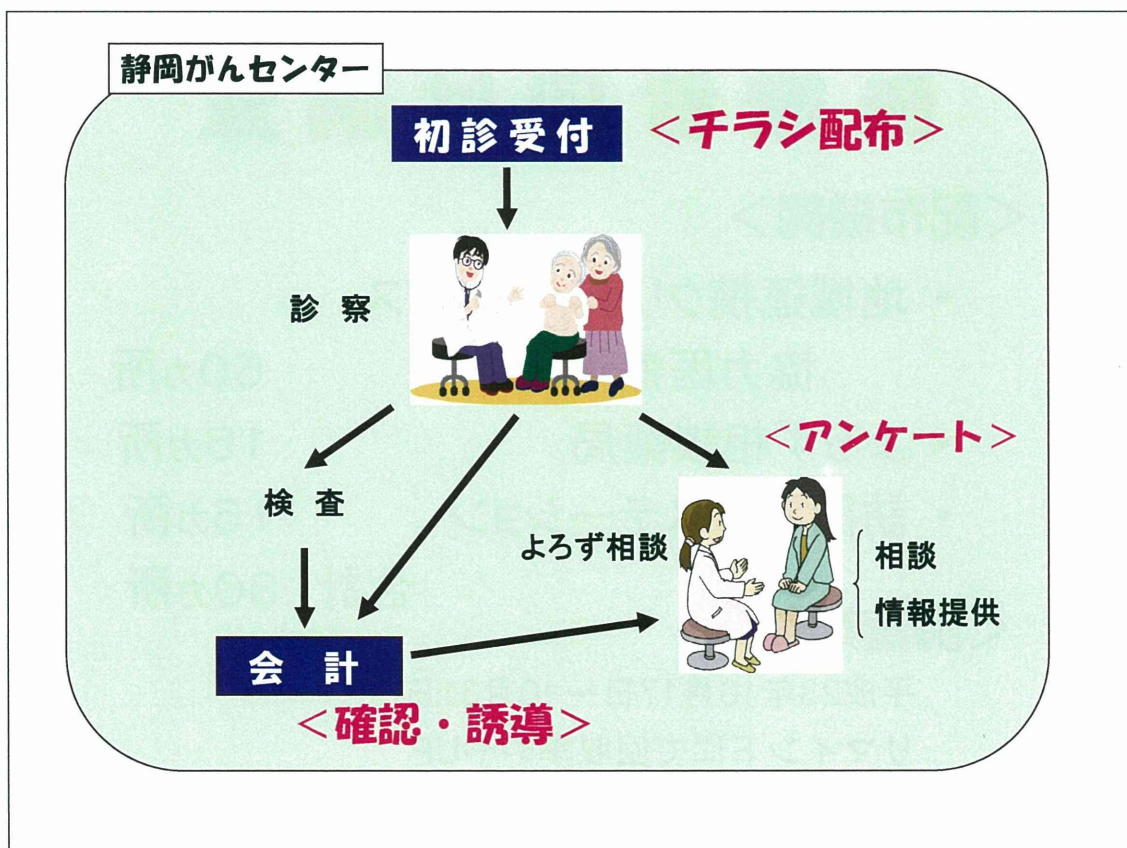
- ・ 地域連携クリティカルパス
協力医療機関 50カ所
 - ・ よろず相談薬局 15カ所
 - ・ 訪問看護ステーション 15カ所
- 合計 80カ所

＜調査期間＞

平成23年10月17日～10月31日
リマインドにて回収率ややUP

患者向け調査

- 調査開始 2011,10,17～2012,2,13
- 相談支援センターにてMSWが説明・配布
- サンプル目標数 50件
 - 同意:49件、不同意:1件
 - 調査実日数:77日
 - 10月(11):8件、11月(20):26件、
 - 12月(19):8件、1月(19):6件、2月(9):2件



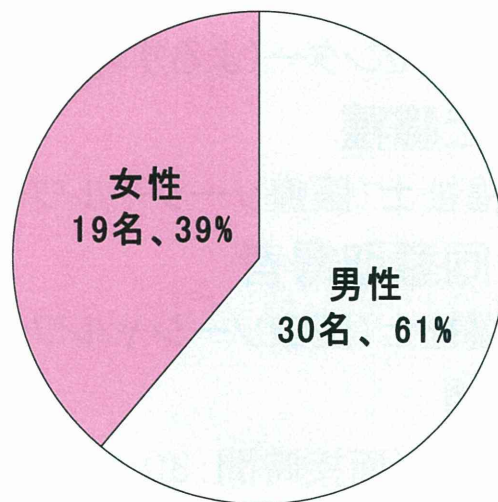
配布経路

- 配布場所
 - － 相談支援センター(よろず相談)
- 配布した職種
 - － 社会福祉士(医療ソーシャルワーカー)
- 説明・同意取得者
 - － 社会福祉士(医療ソーシャルワーカー)
- 説明時間
 - － 10～20分(面接時間:30～45分)

相談支援センター配布のメリット

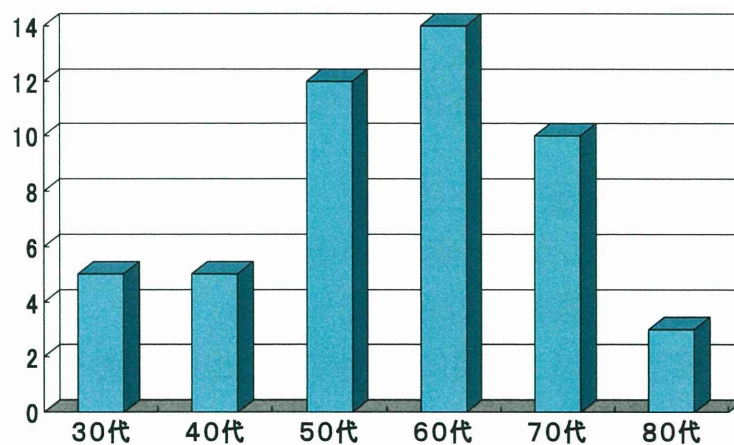
- 積極的な意志をもって来訪する
- アンケートをきっかけに、今後の検査についての情報、気持ちの表出、現在の気がかりなどを相談として受けとめ、対応できる
 - 説明・同意 10～20分
 - 1回目アンケート実施 10分
 - 相談・情報提供など 10～20分
- よろず相談を早い時期に利用することで、必要性に応じた利用につながる
(患者が急変し亡くなったケースでは、遺族がグリーフケアでよろず相談を活用→継続介入)

男女比



N=49

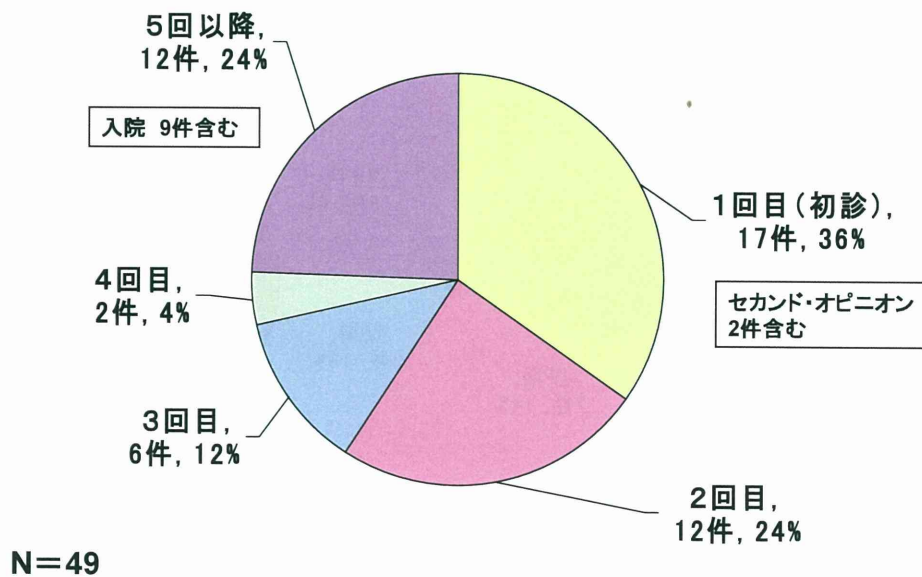
年齢分布



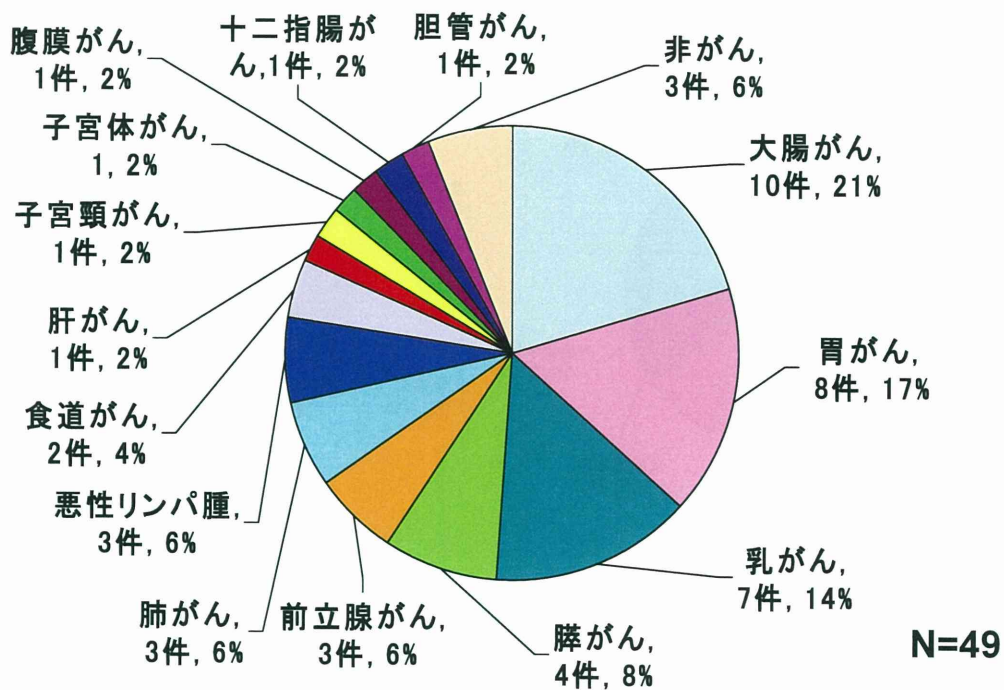
N=49

* 32歳～87歳

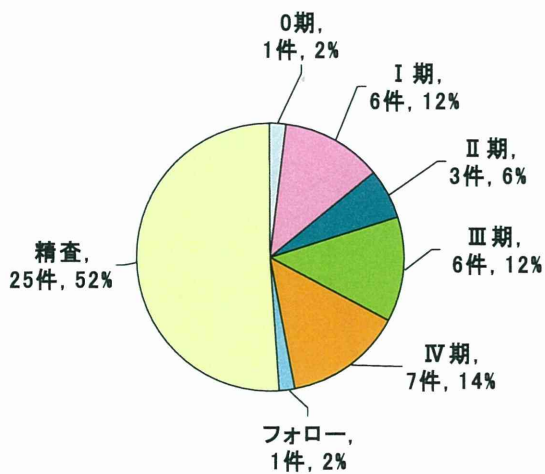
来院回数



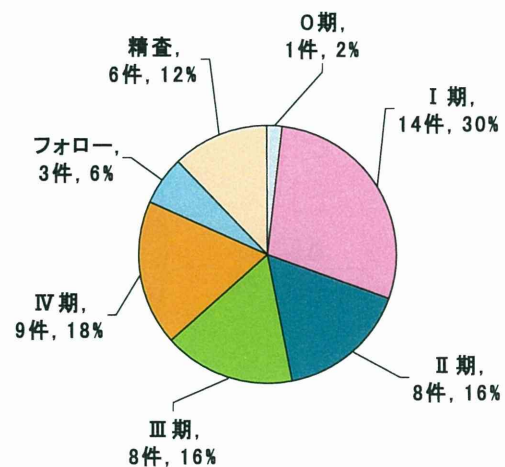
疾患別



病 期



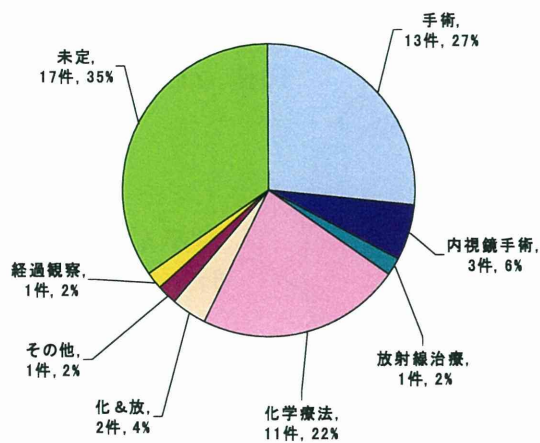
調査時



現 在

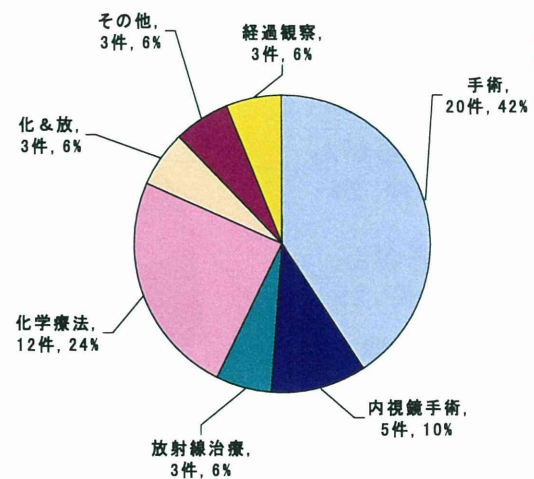
治 療

N=49



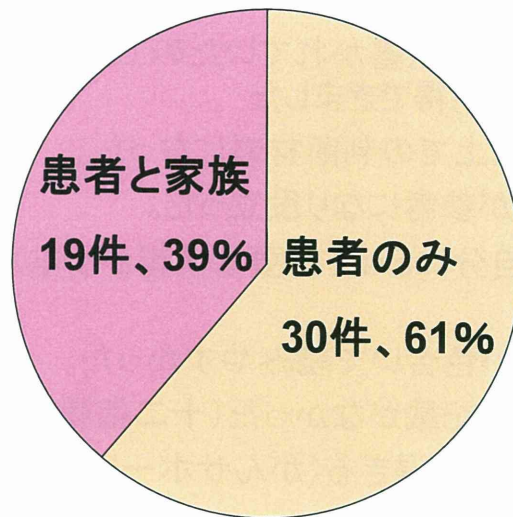
調査時

N=49



現 在

来訪者



N=49

その他の状況

- ・ 初発患者48件、再発患者1件
- ・ がんの既往歴
 - － 前立腺がん（既：大腸がん）
 - － 上行結腸がん（既：胃がん）
 - － 大腸がん（既：胃がん、膀胱がん）
 - － 参考）胃がん（既：十二指腸カルチノイド）

回収状況（2回目アンケート）

- 21件/48件（不同意：1件、死亡：1）
- 治療についても詳しく書かれていたので先生からの説明もさらに良く分かり、納得できました
- 治療を選択する上での判断材料になった。
- 経験者の意見が参考になり役立った。
- 厚みのわりに自分にとって必要な情報が少なかった。持ち運びが重い。
- 図が多く、優しい色合いで読みやすかった。
- 病気別の情報に記載がなかった（十二指腸がん）
- タイトルがストレート過ぎる（がんサポートガイドブックなど）

分担研究報告（田城）

厚生労働科学研究費補助金 第3次対がん総合戦略研究事業
平成23年度 分担研究報告書

かかりつけ医・地区医師会におけるがん必携の活用に関する研究

分担研究者 田城孝雄 放送大学教授・順天堂大学客員教授
研究協力者 天木 聡 板橋区医師会 会長
水野重樹 板橋区医師会 副会長
多比良 清 板橋区医師会 理事

地区医師会（板橋区医師会）の会員が、がん必携をどのように活用できるかを、調査票を用いて調査した。配布会員数 367 に対して回答数は 78 であり、回収率は 21.3%であった。

「患者必携 がんになったら手にとるガイド」は、かかりつけ医である、地域の診療所の医師（地区医師会員）に認知されておらず、地区医師会員に対して、がん必携の普及・啓発が必要である。その活用方法として、診療所内に置いて、患者に自由に見てもらう方法が、もっとも現実的であると考えられる。抗がん剤や医療用麻薬を処方されている患者や、がん診療連携拠点病院から紹介された患者など、がん診療連携拠点病院や、がん専門医から紹介された患者に対して、説明する際に活用できると考えられ、地域におけるがんの病診連携の重要なツールとなると考えられた。

A. 研究目的

「患者必携 がんになったら手にとるガイド」は、がん罹患して間もない時期の患者だけでなく、地域の診療所、療養中の患者も手に取り、医療連携や療養介護での情報共有ツールとして活用する自立支援型がん情報のツールである。患者必携の配布ルートは、がん診療連携拠点病院や行政の窓口などが想定されている。

しかし、患者にとって最も身近な存在である医療機関は、かかりつけ医である、地域の診療所である。そこで、がん患者を地域で支えるための情報提供・連携・支援の取り組みを構築するために、地区医師会（板橋区医師会）の会員が、がん必携をどのように活用できるかを、調査票を用いて調査した。

会からの通知伝達ルートを用いて、各医師会員に、患者必携本体、調査票、返信用封筒を同封して、送付した。回答（記入した調査票）は、自記式、同封した返信用封筒にて回収した。

C. 研究結果

回答数 78 配布会員数 367

回収率 21.3%

回答した医師会員 78 (男性 66、女性 12)

年齢 30 歳代 1

40 歳代 17

50 歳代 25

60 歳代 15

70 歳以上 20

B. 研究方法

板橋区医師会の A 会員に対して、板橋区医師

勤務先 診療所 72 (管理者 68、勤務医 4
病院 6

診療科	内科	46
	外科	10
	整形外科	6
	小児科	12
	産婦人科	4
	皮膚科	4
	眼科	3
	耳鼻咽喉科	3
	精神科	2
	その他	3

がん患者の診療の有無

がん患者を診療している	34
がん患者を診療していない	43
無回答	1

患者必携認知度

患者必携を知っていた	11
知らなかった	64
無回答	3

患者必携は役に立つと思うか

とても役に立つ	27
まあ役に立つ	35
どちらともいえない	11
あまり役に立たない	0
まったく役に立たない	0
無回答	5

書かれている内容の詳しさについて

とても詳しすぎる	2
やや詳しすぎる	21
ちょうど良い	61
やや簡単すぎる	1
とても簡単すぎる	0
無回答	3

活用したいか

絶対活用したい	14
ときどき活用したい	49
どちらともいえない	16
あまり活用したくない	3
全く活用したくない	0
無回答	6

対応方法

- ・院内に見本を置き、待合室で自由に見てもらう

対応可能 46.2%

- ・院内に見本を置き、要望があった人に入手法を説明する

対応可能 30.8%

- ・抗がん剤や医療用麻薬を処方されている患者に紹介する

対応可能 28.2%

- ・がん診療連携拠点病院から紹介された患者が持っているとき、説明する

対応可能 19.2%

D. 考察

患者必携に関する、かかりつけ医の認知度は、14%と低かった。がん診療連携拠点病院だけでなく、医師会を通じて、各医師会員・かかりつけ医に対しても、普及啓発活動が必要である。

患者必携について、患者の役に立つと回答した医師会員は、79.5%であり、医師会員である診療所医師の約8割が、有用であると回答した。

その活用方法としては、「院内に見本を置き、待合室で自由に見てもらう」、「院内に見本を置き、要望があった人に入手法を説明する」というものであり、積極的に、自ら患者必携を手に取り、説明するという回答は少なかった。

一方、「抗がん剤や医療用麻薬を処方されている患者に紹介する」、「がん診療連携拠点病院から紹介された患者が持っているとき説明する」など、がん診療連携拠点病院や、がん専門

医から紹介された患者に対して、説明する際に、患者必携を活用できるとの回答も次いで多かった。また、がん診療連携クリティカルパスの普及・推進との連携で活用するという意見も見られた。

E. 結論

患者必携は、かかりつけ医である、地域の診療所の医師（地区医師会員）に認知されておらず、地区医師会員に対して、患者必携の普及・啓発が必要である。

その活用方法として、診療所内に置いて、患者に自由に見てもらう方法が、もっとも現実的であると考えられる。

抗がん剤や医療用麻薬を処方されている患者や、がん診療連携拠点病院から紹介された患者など、がん診療連携拠点病院や、がん専門医から紹介された患者に対して、説明する際に活用できると考えられ、地域におけるがんの病診連携の重要なツールとなると考えられた。

G. 研究発表

1. 論文発表

特になし

2. 学会発表

特になし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得

特になし

2. 実用新案登録

特になし

3. その他

特になし

分担研究報告（谷水）

厚生労働科学研究費補助金 第3次対がん総合戦略研究事業
平成23年度 分担研究報告書

がん患者・家族総合支援のあり方に関する考察

研究分担者谷水正人 国立病院機構四国がんセンター 統括診療部長

がん患者家族への支援のあり方を検討し、愛媛県がん診療連携拠点病院（国立病院機構四国がんセンター）に「がん患者・家族総合支援センター（仮称）」の設立を提唱した。

がん患者・家族総合支援センター（仮称）は愛媛県がん対策推進条例に謳われた緩和ケアの充実、在宅医療の推進、がん医療の水準向上、がん登録の推進を実行するための拠点である。患者・家族用の場と外部医療者用の場を設ける。患者・家族用の場としては県民の交流・患者支え合いの場、患者・家族用図書・情報検索ブースとして開放する。医療者用の場としては地域の医療介護福祉関係者が自主的に利用できる研修・交流の場として開放する。地域を支援する人材の養成、特に在宅緩和ケアを支える情報提供や研修企画、連携パス推進のための調整機能を充実させる。地域医療機関への人材派遣を計画する。それらを担う人材の確保が肝心である。同センターはがん難民の解消を目指した提案である。地域連携を支え、顔の見えるネットワーク作りに貢献する。今後の患者支援、医療者支援、地域連携拠点のモデル構築を目指したい。

A. 研究目的

全国の自治体でがん対策推進条例の制定が進んでいる。愛媛県では県民の生命を尊重する良心にもとづき温かみのある適切ながん対策の推進を目的として愛媛県がん対策推進条例が制定された（H24年3月）。この条例では緩和ケアの充実、在宅医療の推進、がん医療の水準向上、がん登録の推進、がん患者の負担軽減、がんの予防早期発見の推進が謳われている。それらの事業を遂行するための拠点として「がん患者・家族総合支援センター（仮称）」（以下、総合支援センター）が果たすべき役割を提唱する。

B. 研究方法

国のがん対策基本法、がん対策推進基本計画、愛媛県がん対策推進条例に謳われたがん患者支援の理念を実現するための方法論とその拠

点のあり方を検討し、愛媛県がん診療連携拠点病院たる国立病院機構四国がんセンターと愛媛県に対し、「がん患者・家族総合支援センター（仮称）」（以下、総合支援センター）の設立を提唱した。また総合支援センターの果たすべき役割について検討した。

（倫理面への配慮）

本研究では患者情報、個人情報には研究対象としないため、各成果物そのものは個人情報保護には接触しない。

C. 研究結果

1) 総合支援センターに備えるべきスペース

患者・家族用の場と外部医療者用の場が必要である。患者・家族用の場としては県民の交流・患者支え合いの場（常設の患者サロン）、患者・家族用図書・情報検索ブースを設け、開